



永久の旅

1

兄弟の絆が、
今確かめられる

ジョナ

1, 迷子の兄弟

どうも、シャラです。

いま僕は、兄さんのディオルと旅をしています。理由は、またあとでね。

で、いま僕たちがいる場所だけど……。分かりません。

はっきり言っちゃうと、迷子になったんだよね、僕たち。本当だったら、砂漠はとっくに抜けて、もう町についているはずなんだ。なのにいまは、どこを向いても、砂、砂、砂。。。。。

絶対に、道を間違えた。間違いない。

「兄さん、もう疲れたよ。いい加減休もうよ」

ハアハア言って、僕は言った。だって、飲まず食わずで、何時間だよ。それも、砂漠で。休憩なし。殺す気があっ！

「だめだ。ただでさえ、おれたちには食べ物と水と金がないんだ。いま水をかぶ飲みしたりしたら、後で干からびるだろうが。そのこと考えたら、今耐えたほうがいいんだよ」

そういいながら、兄さんが汗で額に張り付いた前髪をかきあげた。僕と違って、ちょっと美形な僕の兄さん。勉強じゃなくて、スポーツのほうが得意な人。剣の扱いなんか、僕と比べ物にならないくらい、上手だ。だから、荷物持ちはだいたい兄さんの役目。僕がやったりしたら、すぐにバテちゃう。

「でも、たしかにお前の言うことももっともだな」

スポーツ男子の兄さんが疲れたっていうんだから、ヒョロ男の僕の疲れがハンパじゃないことは、たぶんお分かりだろう。

「兄さん、水はあとどれくらい残ってるの？」

そう聞くと、兄さんは荷物をドサッと置いた。砂埃がもうもうと舞い上がる。リュックのジッパーを開けて、ごそごそと中を探っている。これでも、かなり荷物を少なくしたんだけどな。ぜんぜん水筒が見つからない。

「あ。あった、あった」

やっと見つかった水筒は、明らかに軽そう。やっとの思いでぎゅうぎゅうの水筒カバーを取り、透明な水筒になったと同時に、僕と兄さんは深いため息をついた。いい意味じゃなく、悪い意味で。

「少なすぎるな」

「うん。。。。。」

中に入っている水は、ほんとうにそこを付きそう。立てるときのバランスを考えて、その真ん中が、ちょっと出っ張っているんだ。その出っ張りを下回るか、ちょうど同じ高さかかってくらい。つまり、1センチくらいなんだ。

「運河もなければ――」

「水たまりすらない、か」

はああ〜、と二人同時にため息。でも、無理ないよ。このあまりにもひどすぎる状況。いくら

なんでも、あんまりだあ～！神様さ、もしかするとほかのところで忙しくって、こっちに幸運の振りまくの、忘れてない？あ、砂漠には人はめったにいないから？おいおい、パトロールくらいしたらどうだよ・・・・・・・・・・。

「シャラ、ちょっと休むか」

「うん」

本当は、「うん！」って元気いっぱい言いたいよ。けど、さすがに喉がね。

「だれか、ここを通ったりしないかな」

「バカ、んなわけないだろ。おれたちは、道を間違えて、ここにいるんだぜ？そこが、偶然にも人が通る道でした！とかだったら、奇跡のなかの奇跡だぜ」

そりゃあね。こんな砂漠に、用があって来る人なんていないよね・・・・・・・・・・。

はああ～～・・・・・・・・・・

☆

パカッ、パカッ、パカッ・・・・・・・・・・

あ、馬のヒツメの音。とうとう、幻聴まで聞こえ始めたか。もしかして、とうとう死と生の境目！？うわあ～！まだ死にたくないよお～！

「君たち、大丈夫か？」

大丈夫じゃないよ。見て分からないの？今の声、世の中で言うところの神さまとか？なんていうか、あんまりありがたみのない声なんだね、意外と。

うすく、目を開けてみる。

おじいさん、とまではいかないけど、歳をとっている男の人。う～ん、いうなら、おじいさん？うん、そのへんだな。ところどころ白髪の間違った髪とぼうぼうに生えているヒゲ。よし、心の中でのあだ名は、「ヒゲおじいさん」だ。

「起きれるかね」

そのヒゲおじいさん、僕の背中を押して、起こしてくれた。ってことは、寝てたの？この炎天下で？熱中症寸前。危ない危ない。

「ありがとうございます」

そういうと、ヒゲおじいさんはニコリと笑った。

「水をやるよ。ほら」

そう言って、ヒゲおじいさんは水が満タンに入ったボトルを渡してくれた。ああ、この重さ！嬉しい重さだね。久々だよ。

「ぷはっ。ありがとうございます」

水をガブガブ飲み、やっと口を離してから、そう言った。

「いやいや、礼はいい。それより、お前さんたちは旅人かね？」

「ああ、そうだ」

いつの間にか、ディオール兄さんが起きていて、答えた。僕の隣で、あぐらをかいて座っている

。

「そうか、そうか。それなら、おふたりさんに聞きたいんだがね」

「ん？」

「なんですか？」

僕と兄さんは、同時にそう言った。

「この辺で起きている、誘拐事件を知らんかね」

「誘拐事件？」

「そんなのかがるのか？物騒だな」

兄さんは、顔をしかめてそう言った。

「ああ、全くだよ」

ヒゲおじさんは、うつむきながらゆっくりと首を振った。

「で？あんたは、そのことをなんで聞いた？」

「ああ、それなんだがな」

ちょっと、ヒゲおじさんはもったいぶるようにゴホンと咳をしたり、他に人がいるわけがないのに、右や左を見回したりした。

「言わないなら、聞かないよ？」

僕は、いい加減イライラしてきて、荷物の準備をし始めた。

「ああ、わかったわかった。いうから、待ってくれよ」

ヒゲおじさんが、中腰浮かせて僕を止めようとしたから、仕方なく僕はもう一度砂の上に座った。

「それがな、わしはヴィクネ王国の人間なんだが、一ヶ月前から、我が王国の姫が行方不明になってしまってな」

さっきまでサラサラした髪の毛をいじくっていた兄さんが、ピタリと手を止め、ヒゲおじさんの方に向き直った。

「国んなか、全部探したか？」

「探したに決まってるじゃないか！姫さまの部屋は、荷物全部ひっくり返して探したし。城の中だって、塔のてっぺんや、地下室も探しただろ。国じゅうの宿だろ。国じゅうの地下室・地下倉庫だろ。姫さまのお友達の家・部屋だろ。その中のツボとか、隠し扉とか……！」

とにかく、全部探したんだ！国総出でな。けど、見つからなかったんだよ」

ヒゲおじさん、泣きそうな顔になってます。よっぽど必死になって探したんだね。

「で、国を飛び出してほかの国に行ったんじゃないかと思って、ここまで探しに来た、と」

僕は、まず今分かっていることをまとめて、そう言った。

「でも、それだけで、なんで誘拐だって分かるんだよ？」

そ、そうだそうだ。ただいなくなっただけで、誘拐って決めるのは良くないぞ！

「それがな、ほかの国でも、子供がいなくなっているんだよ。でも、一つの国で何人も、ってわけじゃないんだ。一つの国で、一人だけ。必ず子供がいなくなっている。男の子も、女の子も。王族も、庶民も。接点なんかは、一つもない。なんとなく選びました、みたいな感じでね」

なんとなくって……。あまりにもあまりな解釈。

「その誘拐された子供たちに、本当に共通点はないのか？」

「なんで？ さっき、接点はないって、言ってたじゃん」

「だって、これだけの数の子供が、いろんなところで誘拐されてるんだぜ？ 同じ犯人か、それぞれ別人か。もしかして、グループで行動してるのかな……」

なるほどね。犯人がひとりか、複数かを考えるのか。

「そういえば……」

ヒゲおじさん、思い出したように、天をちょっと仰いでます。

「子供が誘拐されたと思われるところには、見たこともない植物の葉が落ちているんだ」

「どこの植物図鑑にも載ってなければ、どこの植物学者も見ることがないの？」

「ああ。ファイダラ国の学者に聞いたが、全員見たことがなかったってよ」

ファイダラ国っていうのは、ここら辺で一番多くの学者を生み出している国で、別名「科学の次元」と呼ばれている。とうとう国も飛び越して、「次元」までいったよ。

とにかく、そのファイダラ国の科学者さんたちが知らないんだったら、多分どこの学者も知らないだろう。

「なんか、大変ですね……」

事態がおおきすぎて、僕にはちょっと読み込めなかった。だから、この程度の返事しかできない。

「ま、なんにしろ。今日は、もう移動はできない。ここで、テントを張るとしよう。君たちは、どうする？」

たしかに、気づくとあたりはもう薄暗い。ここからの時間帯じゃ、モンスターの活動時間として、ピークの時間。もう、移動はできないな。下手に移動したら、モンスターに襲われる可能性も、一気に高くなる。暗くなったら、黙ってテントを張るのが、一番かしこいやり方だ。

ヒゲおじさんは、馬に背負わせているリュックから、大きめのテントを取り出した。

「じゃあ、僕たちも――」

「ここにテントを張るとすっかあ！」

兄さんは、もうキャンプ道具一式を取り出して、杭と金づちも取り出している。結構仕事が早い。

さっさと杭を打ち始めるから、僕はポケーッとその様子を見ています。

「シャラ、お前も手伝えよ」

兄さんが、小さめの金づちを僕に差し出した。

2, 兄弟喧嘩

「そういえば、あなたの名前は？それと、そっちにいる馬の」

いま、僕たちは砂漠のど真ん中で、キャンプをしています。ディオル兄さんと、僕と・・・・・・・・、ヒゲおじさんとで、小さな焚き火を囲んで。でも、命を救っていただいた人に、ずっと「ヒゲおじさん」は失礼なので、名前を聞いてみました。

「ああ。そういえば、まだ名乗ってかったね。わたしは、ダルダ。あっちの馬は、フィー。君たちこそ、まだ名前を聞いてなかったと思うんだが。それに、歳は？随分若そうだが」

そういえば、そうだった。

「おれは、ディオル。歳は15」

「僕は、シャラです。歳は、12歳」

そう答えると、ヒゲおじ・・・・・・・・じゃなかった、ダルダさんは、目を丸くした。

「ほう！やはりお若いな。そんな若者が、どうしてこんな旅を？」

「わるい？」

兄さんが、ちょっとダルダさんを睨んだ。兄さん、これぐらいのことで睨まなくても。

「いやいや。そういうわけではないのだよ」

ダルダさん、ちょっと慌てたみたいに、手を振った。

「じゃあ、どういうわけ」

「いや、君たちみたいな子供が、よほどの理由でもない限り、旅には出ないだろうと思ってな。それに、ご両親は、反対しなかったのかね？」

ちょっと、ぎくりとした。両親・・・・・・・・。お父さんに、お母さん。

「その反対するはずだった両親を探してるんだよ」

兄さんは、こともなげにサラリと言った。

「ちょ、ちょっと兄さん・・・・・・・・！」

僕は、兄さんの袖を引っ張りながら、必死になって止めた。

「1年前に出て行っちゃってさ。それっきり、一回も家に帰ってこねえんだよ」

そう。僕たちは、1年前に出て行ったっきり、一度も家に帰ってこない父さんと母さんを探して、旅をしているんだ。父さんと母さんが出て行ったところを見たのは、兄さんだけ。早朝だったから、ぼくは多分まだ寝てたんだと思う。でも、やっぱり最後に顔ぐらい見たかったな・・・・・・・・。

「そうか。辛いことを聞いてしまったな」

「いや、いいんだ。本当のことなんだし。こういう自由の旅も、結構面白いしさ」

兄さんは、ダルダさんに笑った。でも、これは本当に笑ってない。本当は自分も、辛いんだ。でも、強がってか、弟の僕に弱いところを見られたくないからか、こうやって言っているだけだ。僕にはわかる。ごまかしたってダメだよ、兄さん。

焚き火の火を消して、おれたちはそれぞれのテントに入った。それぞれって言っても、ダルダのテントと、おれとシャラのテントとってただけだ。

さっきの旅の理由を聞かれてから、シャラはむっつりと黙ってしまった。おれ、なにかまずいこと言ったっけ？

寝袋の中で、ずっとそれを考えていた。でも、いい加減夜空の星が満天に見えてくると、眠くなってきた。ウトウトし始める。ああ、もう寝よう。無理だ、これ。まぶたが白旗あげてる。

「兄さん」

せっかく寝ようとしていたところで、シャラが問いかけてきた。まったく、なんなんだよ。

「なんだよ。寝れないのか？」

おれは、面倒くさかったから、てきとうにそう言った。

「兄さんはさ、本当に父さんと母さんが帰って来るって思う？」

「ハッ、当たり前じゃん！でかけて、そのまま帰ってこない親なんかいるかよ」

おれは、あざけ笑うみたいに言ってやった。

「本当に？本当にそう思うの？」

「しつこいなあ。そうに決まってるってば。いい加減寝ろよ！」

「ねえ、答えてよ」

「うるさいっつってんだろ！」

最後におれが叫ぶと、シャラは黙ってしまった。

そして、ばさっと音がして、テントの入口が開く音がした。

「・・・・・・・・外、行ってくる」

兄弟喧嘩をしたあと、シャラは必ず外に出る。外で何をしているのかを見たことは、一度もない。見ないほうがいいに決まってる。一人にしたほうがいいんだよ、こういうときは。

そのまま、しばらく黙ってた。沈黙が続く。

・・・・・・・・遅い。遅すぎる。いくらほっといたほうがいいたって、気になる。

「うわあああああああああ！」

突然、ものすごい叫び声がした。寝袋に入ったまんま飛び上がった。その拍子に、天井の低いテントの針金に、髪を引っ掛けた。やっぱり、新しくて、天井の高いやつ買うべきかな？

いやいや、そんなことより。

さっきの叫び声の主、絶対にシャラだ。

「シャラ！？」

針金に引っかかった髪をほどくのが面倒で手間がかかりそうだったから、思いっきり引きちぎった。うう、痛い。自分でやったくせに、すごく痛い。寝袋の上に、おれの金色の混ざった茶色の髪が、ハラハラと落ちた。

「兄さん・・・・・・・・！」

かすかに、まだシャラの声が聞こえた。何が起こった？すくなくとも、サソリとか、トカゲ

とか、そんなものじゃない気がするぜ。

「シャラ！！」

叫びながら、テントの外に転がり出た。しかしそこには、シャラの影もなかった。

「シャラ・・・・・・・・？」

隠れてるのか？驚かそうとしてるのか？なんなんだよ。どういうことだよ！

「どうしたのかね？」

ダルダが、眠そうに目をこすりながら、のたのたとテントからはいだしてきた。

「どうしたじゃねえ！シャラがいねえんだ！どっかに行っちゃった！」

「シャラくんが？本当かね」

「本当さ！おれはな、冗談は好きだが、シャラのことでも冗談を言うのは、一番嫌いなんだ！シャラの冗談が言われてたら、理由もきかずに、思わずぶん殴っちまうぐらいだからな」

そこは、我ながら直さなきゃなって思ってる。でも、やっぱり弟を馬鹿にされるのは、我慢ならないんだ。足を踏み鳴らしながら、さけんでいと、

「ちょっと待ったあ！」

いきなり、ダルダが大声を張り上げた。耳が痛くなる。

「なんなんだよ、ダルダ！」

「君の足元で、なにか光ってないかね？」

ダルダがおれの足元を指差しながら言った。たしかに、なにかがぼんやりと、紫色に光っている。なんとなく、気味が悪い。

ダルダが一度テントの中に引っ込み、もう一度出てきたときは、懐中電灯と、ランプを持っていた。

改めて懐中電灯とランプで光源のあたりを照らしてみた。

「葉っぱ？」

3, 手がかりは光?

そう、葉っぱだった。あろうことか、その葉っぱが、紫色の光を出しているんだ。それも、ピカピカだしているんじゃないくて、ぼんやりとってというのが、また不気味だ。

「これは……！」

「ダルダ、あんたみたことあんのか？」

「あるもなにも！この形をした葉っぱが、わたしが言っていた誘拐事件の現場に必ず落ちていた葉っぱなのだよ！この顔みたいな模様は、間違いない」

たしかに、よくみるとその葉っぱには、泣き顔みたいな模様があった。

「でもさ、偶然とかってのがあるんじゃないの？」

そういうと、ダルダはまたテントの中に戻り、今度はすぐに出てきた。手には、紫の光を発している葉っぱが何枚か握られている。

「これを見ろ。全部、誘拐事件が起こったときにその場所にあった葉っぱだ」

そうって、ダルダはおれが持っていた懐中電灯をひったくって、葉っぱにあてた。たしかに、ぜんぶに泣き顔みたいな模様がついていた。

「なんだこれ……」

不気味にも程があるぜ。なんなんだよ、これ。こんなので、何がわかるって言うんだ。

なんとなく、葉っぱをいろんな方向に向けてみた。直感っていうやつかな。

「君たちの住んでいる国は？」

「イアール共和国だよ。おれも、シャラも、そこの生まれだ。戸籍も、いちおうそこにある」

「イアール国か。あそこはいい国だ。自然豊かで、空気もきれい。子供が育つには、なかなかいい環境だと人気で……」

「あれ？」

ダルダの言葉を遮って、おれは思わずつぶやいた。気のせいだろうか。なんでか、西の方向にむけたら、光が強くなっている気がするんだけどな。あまりにもシャラを見つけないから、なんでも手がかりみたいに見えるのか？妄想ってこえーな。

「どうしたのかね？」

「いや、なんか、西にむけたら、光が強くなった気がしたから」

「え。ち、ちょっと貸してみたまえ！」

そう言って、ダルダはおれから、今度は葉っぱの束をひったくった。そりゃあ、もともとはこいつの持ち物だぜ？けどさ、いくらなんでもひったくらくったっていいじゃないか。

「……たしかに。西の方向だと、光が強くなるな」

や、やっぱり、気のせいじゃなかったのか！？

「でも、どういうことを表しているんだ？」

おれがつぶやくと、ダルダは驚きの目でこっちを見た。

「そ、そんなこともわからんのか！？鈍感な男じゃのお。葉っぱが反応しとるということは、その方向に犯人がいるということに決まっとるじゃろうが！」

ダルダは、吐き捨てるように言い放った。

いくらなんでも、そこまで言わなくていいだろ……。だいたいのは気にしないおれでも、かなり落ち込むぜ、その言葉。「鈍感」って……。おいおい。

「じゃあ、あんたの論が正しければ……」

「この光をたどっていけば……」

「犯人のアジトに行ける……。かも」

交代で文章を言っていき、最後は同時に言った。ううん、今日あったばかりのわりには、見事なファインプレー！

「じゃあ、たどって行ってみる？」

「今からか？真夜中だぞ。いくらなんでも……」

「だって、手がかりは光なんだ。昼間だったら、見えないだろうが」

「うっ。た、たしかに」

はああ、おれって、どこまで考えが行き届いてないんだろ。

「じゃ、早速テントを片付けて、出発するとしよう」

そういうが早いか、おれたちは競争でもしているみたいに、すごいスピードでテントを片付け、荷造りを済ませた。ダルダの馬の……。フィーだったかな。うん、そいつも、先に水とか草とかはたらふく食べてたみたいだったから、準備万端だった。ついでに、おれたちの荷物も、フィーの背中に乗せてもらった。ありがたいことだよな、乗り物って。おれたちも、金が貯まったら、こういうのを買おうかと思ってる（ただ、今は財政的に半端なくやばい。だから、泊まる時だって宿があっても野宿をしている）。

待ってるよ、シャラ。お前のことを可愛いとかって思ったことは少ないけど、おれの大事な弟だ。絶対に、助けてやっからな！助かったら、おれたちの親父とお袋も見つけ出すぞ。

*☆☆

そのあと、歩き続けてなんと2日！しかも、夜にしか行動できないだろう？体内時計が、狂いまくりだぜ。夜に行動するために、昼に寝ておかなくちゃいけないけど、言っておくけどココは砂漠のど真ん中。日照りが強くて、全く眠れない。テントを張ったら、テントの中で蒸し焼き状態になりかける。

地獄だ。生き地獄だ。

眠れないし、日照りはカンカンだし、テントの中で蒸し焼き寸前！食欲も失せる……

。

「そろそろじゃねえの？」

体が前のめりになる。ぶっ倒れそう。おれだって、結構体力はある。けどさ、カンカン照りのなかを、夜も昼も眠れずに、2日ぶっ通しで歩いて見な（ま、歩く機会なんかないだろうけどさ）？死ぬぜ。

「おまえな、さっきからそれしか言ってないだろ？ほかの言葉をしらんのか？」

そうだった？うーん、こういうのを、無意識っていうのかな。よくわからない。

「って、なんでもいいけど！いい加減代わってくれよ。あんた、この2日間、ずっと馬の上だっただろうが！」

「馬の上じゃない。フィーの上じゃ」

「自覚してるなら、降りて代われえっ！」

そう。この出発してからの2日間、あろうことかダルダは、ずっとフィーの上に乗って、右に左にと揺られていた。この砂漠の地面の熱さってもんを知らないんだ、このじいさんは！

「年寄りは大切に扱え」

「2日間、文句言わずに乗せっぱなしにしてやったじゃん。いい加減に代わってくれ！もう足が限界だよ」

「『してやった』とはなんだ、『してやった』とは。ちゃんとした言葉遣いを使いたまえ」

「だああああああああっ！」

限界だああああああっ！

「お？」

発狂しかけたところに、ダルダのそんな声が飛び込んできた。

「なんなんだよっ」

「なんかある」

「は？」

「森か？遠くてよく見えんな」

ダルダは、目を細めて、その上に手を重ねながら言った。

「ちっ。これだから、老人は」

「ろ、老人だとお！？」

「あー、わかったわかった。はいはい、あんたはおじーちゃんじゃありませんよ」

だんだん面倒くさくなってきた。

「んー？・・・って、森じゃんか！なんで、こんな砂漠に森が？」

おれも、目を細めてダルダが眺めていた方向を見た。すると、たしかにそこには、緑色の帽子を伏せたみたいなの、綺麗な森があった。

「すげーよ、ダルダ！あんた、さすがは城に仕える身だな！」

「あ、当たり前だ。これくらいのこと。ひ、姫様に使えるなら、な」

ダルダ～、褒められてかなんてか知らないけど、舌が回らなくなってるぜ～。

「い、行くぞっ！」

そう言って、ダルダはフィーを飛ばして、自分だけ走り去っていった。

「お、おい！置いてくんじゃねえよお」

おれは、ヘトヘトの足を無理やり動かして、ダルダとフィーを追いかけた。

待ってくれ～。

4, 時の水 波の風

ハア・・・・・・・・、ハア・・・・・・・・、ハア・・・・・・・・。

やっと、ダルダと、フィーに、追いついた・・・・・・・・。ハア、ハア。

馬にも乗せてもらえずに、ずっと歩きっぱなし、走りっぱなしだったから、疲れまくった。

「やっと着いたぞ！」

おれたちが目的地としていた、犯人のアジト。このなかに、シャラと、ダルダの国の姫さんが・・・・・・・・！

「ちょっと、待てよ。ダルダ・・・・・・・・」

ダルダは元気いっぱい、やる気もいっぱいだけど、おれのことも考えてくれ。

「ん、なんだ？早く行かせてくれ。一刻も早く、姫様を助けなければ！」

「だから、そのことなんだってば！」

おれは、勢いついているダルダを抑えるように、ちょっと大声を出してみた。ダルダは、それでやっとおれの話の聞いてくれる状態になった。

「おれたちのどちらかに、もしものことがあるとするだろ？そしたら、助けたいやつが助けられないじゃないか。だから、助けたいやつの写真とかを交換して送ってというのはどうだ？」

「・・・・・・・・なるほど。写真を交換しておけば、どっちかに万が一のことがあっても、もう片方も顔を知っているから、助けられるというわけか。そういうわけなら・・・・・・・・」

ダルダは、フィーに持たせていたバッグから、一枚の写真を取り出して、おれに差し出した。そこには、けっこう美人な女の子が映ってた。この辺じゃ珍しい、サラサラした黒い髪は、後ろでゆるく束ねてある。顔立ちからして、ちょっと気は強そうに、ネコ目だった。目の色は、おれの目と似たこはく色。でも、この子のほうが透き通っているかもしれない。スタイルもいいし、国でも、やっぱり人気者じゃないかな。いや、外見はいいけど、内面はわがままだったりして。

「名前は、なんていうんだ？」

「ルイナ姫」

「よし。わかった」

「シャラクんの写真はいいよ。見たことあるからね」

「んじゃあ、行くか」

おれたちは、改めて森に足を進めた。

*☆☆

「これ・・・・・・・・かな？」

森の中に入って、思ったことを順にあげると、こうなる。

- 1、毒蛇とか毒虫とか、いないよな？
- 2、やっぱり、極悪犯のアジトなんだから、罨とかあんのかな？

3、アジトって、一体どんなところにあるもんなんだよ・・・・・・・・・・。

こんなかんじ。

で、全部心配ご無用だった。

毒蛇・毒虫はいないし。罨も全くなかったし。なにより・・・・・・・・・・。

アジト、分かりやすすぎたし。

「うそっぽすぎないか？」

おれたちの目の前にあるのは、木で出来たドア。おいおい、こんなものなのか？国に一人子供をさらっているっていう極悪犯のアジトっていうのは？

「でも、ここしかないよな」

「たしかに、森の中は全部見たけどさ」

そう。この森、小さすぎた。こんなもので森と言うのは小さすぎるし、林というのはまだ小さいし、言うなら手入れをしていない公園かな。けれど、おれの持っている葉っぱは、確実にこのドアを指している。

「入ってみるか？」

そのドアは、特別大きな樹に『彫られた』って感じでくっついていて。だから、（入ってみるかって言ったって、入れるのかよ、これ）っていうか感じで、ダルダの言葉にツッコミをいれていた。

でも、ものは試した。

「じゃあ、開けるぞ」

おれは、そっとドアのノブのところに手を伸ばそうとすると、

「いや、まてまて。まずは、ノックだろ」

と言って止めた。

「なんでノックとかしなくちゃいけないんだよ！？ココは、誘拐犯のアジトだぞ？」

「そりゃあ、そうだけど・・・・・・・・・・！」

そんな感じでもめていると、突然ドアがギィッと音をたてて開いた。

「！！」

一瞬で静かになり、ドアのほうを見た。なんなんだよ、こんどは！

モンスターか、犯人か！？どっちにしろ、シャラは返してもらわなくちゃいけないけど！

思わず剣のつかを握ってしまったおれだったが、そんな心配も無用だった。そこにたっていたのは、ほんの小さな男の子だったからだ。ほんの小さなっていっても、シャラより数歳年下ってぐらいだと思う。

「なんだ、旅人さんたちか」

その男の子は、おれたちを見て安心したようにそういった。

「親分を倒しにきたのかと思っちゃった」

そうだよ。その「親分」が犯人なら、そいつを倒しにきたんだよ。

いや、ちょっとまて。親分？

「え、親分って？」

ダルダも同じことを思っていたらしく、そういった。

「僕たちのリーダー。僕たちの救世主。僕たちは、その親分の遊び相手でもある」

リーダー？救世主？遊び相手？なんか、まったく種類の違う言葉が出てきてるけど・・・・・・・・。どういう意味だ？

「まあ、入りなよ」

男の子が、にっこり笑っておれたちを中に入れた。ドアの高さは小さくて、おれよりも10センチぐらい背の低いダルダは、さっさとフィーを入り口近くにつないで入っていったが、おれはそう簡単にはいかない。首を曲げ、背中も曲げ、剣を杖代わりにして中に入った。腹筋があっても、ちょっと辛いぜ、この体制は。

中に入ると、そこは階段があった。けど、ものすごく深い。底が見えないもんな。それによくみるとかなり階段は曲がりくねっているみたいだ。おれたちは懐中電灯とランプを持っていても、先がよく見えなくて、一段踏み外したり、天井に頭をうったりしていた。けれど、一方の男の子はというと、ランプもろうそくもなしで、ひょいひょいと降りていく。言っておくけど、男の子は一番前で、おれたちを先導している。だからおれたちの光で見えてるんじゃないかと思うかもしれないけど、この光、何の役にも立っていない。なんと、あろうことか、30センチ先も見えるか見えないかが怪しい。つまり、一人の30センチ半径で光としては精いっぱい。何も持っていない男の子は、自分の感覚か、そんなものを頼りに歩いていることになる。

「そこ、ちょっとぬれているから気をつけて」

そう注意してはくれるんだけど、注意するのが遅くて、すでに転んでるって感じだった。はっきりいって、こっちも意味がない。

「この先は、少しずつ天井が高くなっていくから、後ろのお兄さんはちょっと楽になると思うよ」

先は見えないはずなのに、そんなことも言ってる。デタラメじゃなのかと思っても、もう少し進んでみると、本当に天井が高くなって、背中も首も曲げずに進むことができるようになる。

「ちょっと待っててんね。扉を開けてくるから」

そう言って、男の子は暗闇の中に駆け出していった。暗闇の奥から、ゴゴゴゴ・・・・・・・・、と低い音が聞こえてきた。随分と重そうな扉だな。

でも、ずっと待っていても、男の子は戻ってこない。最初は、「まあ、そのうち来るだろう」と思っていたけど、最後の方は足踏みをしてまっはめだった。

「遅い。遅すぎる」

「確かにな。でも、待っててくれと言っていたんだから。それに、この先の道をわしらは知らん。いったところで、何の意味もないと思うぞ？」

「これまでの道、全部一本道だったじゃないか。だったら行けるだろ」

そうやって、おれは前にいるダルダを押しつけて、進んでやった。

「わっ、ちょ・・・・・・・・。危ないだろうが！」

ダルダは、半泣きみたいな声で言った。

「ごめん、ごめん」

めんどくさくて、テキトーな返事しかしてやらない。

「っていうか、何かあるぞ」

おれは、道の先に光があるのを見つけ、そう言った。

「えっ！？どこどこ」

ダルダは、明るい声を上げ、今度をおれを押ししてきた。

「うわっ。お前だって、人のこと言えないだろ！？」

また、ケンカ。我ながら、いかげんにしろよと言いたくなる。

「わかった、わかった。とにかく、行くぞ」

ダルダも、やり返し見たいにテキトーな返事をしてきた。

「ちえっ。なんなんだよ……………」

舌打ちをしながらも、後からダルダを追う。一人で待ち続けるのは、たぶん精神的にもめいると思う。特に、こんなに暗くて、湿っぽいところだったら。改めて考えたら、おれが閉所恐怖症とかじゃなくてよかった。そんなもんにかかってたら、シャラどころか、子ネコも助けられないと思う。

あとちょっとだ。あとちょっとで、シャラを助けられるんだ。待ってろよ、シャラ。いま、助けてやるからな。ずっと、お前に迷惑かけっぱなしってわけにはいかないだろ？

5, 記憶の沼

光が漏れているのは、階段をさらにおりたところ。男の子のアドバイスもないわけだから、結構きつい。しかも、せっかく広くなったのに、また狭くなっていつているじゃないか。

「あと少しで着くぞお」

前で、ダルダがそう言った。声の響き方からして、おれよりもけっこう前を進んでいるっぽい。背が低いのは、いいことなのか悪いことなのか。

進み続けて五分ぐらいたったかな。少ししかないと思っていた階段は、思ったとおり一本道ではあったが、かなり長かった。途中でどっちかが転びそうになっては、もう片方が助けてやる。そうやって進んでいたんだけど、おれはダルダに頼らずにここまで来た。別に、プライドとか、そんなんじゃない。一度こけて、そのときにダルダが反射的におれの手を掴んでくれたんだけど、踏みとどまれずに一緒にこけて、おれの上に倒れてきた。あのときは、本当にやばかった。ちょっとぼっちゃりしているダルダの体重は当たり前だけどシャラの2倍近くあったと思う。

姫様に仕えている人間って言ったら、なんていうか、ハンサムでスラーっと背が高くて、強くて優しくて……みたいな感じのを、女の子だったら想像するんじゃないかな？

しかーし……。

このダルダには、その条件がことごとく打ち破られている。優しいっていうのはどうとも言えないけど、強くなさそうだし、背が高くもないし、ハンサムでも……ないし。

全世界の女の子達に言っておこう。そこまで完璧な人間、そうそういないよ？あまり求めすぎないほうがいい。雑誌とかに出ているモデルだって、いくら見た目がいいからって、あまく見ないほうがいい。実はとてつもなく態度がデカかったり、ウソ泣きで騙そうとしたりする奴かもしれない。だから、付き合うとか結婚するとかなら、中身までしっかりわかりきってから、行動すべきだ。用心に、越したことはないよ。

って、話が思いっきりズレたな。

「あっ、扉発見」

ダルダがそういったのを聞いて、考え込んでいたおれははっと我に返った。

「これは確かに……、扉だな」

おれはそう呟いた。目の前に扉があるのはわかっているんだけど、「ドア」というより、「扉」だった。「ドア」とか、そういうとめちゃくちゃオシャレに感じるけど、おれたちの目の前にあるのは、古臭くて、デカくて、なんの彫刻もされていない「扉」だったんだ。こんだけ大きかったら、けっこう力のあるおれでも、どう開けるかを考えこんだが、男の子が開けたのか、もともと開いているものなのかは分からにけど、すでに開いていた。その奥から、弱々しい光が漏れている。

「おれはともかく、ダルダ。お前、入れるか？」

扉の隙間が狭かったので、おれは意地悪を言ってみた。すると、ダルダはムツとしたような声で、

「失礼な。これぐらいの隙間、余裕で通れるわい。これでも、毎日訓練は欠かしていないんだか

らな」

と言った。

内心、ウソつけよ、と思いつつも「はいはい」と返事をする。ここまで来ると、仕掛けたのは自分のくせに、喧嘩をするのも疲れてくる。下り階段でも、疲れるものは疲れるんだ。これが登り階段だったら、どうなっていたことか……………。

「じゃ、入るぞ」

そういつて、ダルダが入っていったが、通るときはかなり苦しそうだった。こっちから顔は見えないけど、かなり顔をゆがませていただろう。おつかれさん。

でも、やっぱりおれのほうはスッと入れた。それも、ギリギリじゃなくて、かなり余裕がある。ランプで照らされているダルダの顔は、むっつりとして不機嫌そうだった。あ、もしかしておれ、とんでもないこと言っちゃってたのかな。

それは悪いけど置いといて。部屋の中は、なぜかほんのりと明るかった。よく見ると、壁のそこらじゅうにヒカリゴケが生えている。地上じゃ見たことなかったけど、白く光るコケは、けっこう綺麗だった。なんていうか、ランプとかみたいに強制的じゃないし、かといってロウソクみたいに頼りない感じでもない。安心するっていうか、自然の力の表れっていうか。

部屋を見渡していると、自然と足が前に進んだり、横に進んだり、フラフラと動き出してしまふ。次の瞬間、おれは悲鳴をあげるようになってしまった。

「うわあああ」とか「ひいいいっ」とかじゃない、変な声。なぜか道に段差があり、また階段みたいにもう一つ下があるはずと思って瞬時に足を出したが、その期待もむなしく、おれの足はしたにあって欲しかった段につかずに、そのまま落ちていく。もちろん、急に片足で踏みとどまることができずに、おれ自身も落ちた。

「いいいいいいいいいっ！」

悲鳴ってさ、自分で聞いて「今の声、誰だよ？」って言いたくなるような声ばかりで、出さないでおこうと思っても、自然と出てきちゃうんだよなあ。

「え!？」

ダルダが振り向いたのがちらりと見えたけど、もう遅い。うつ伏せで落下するはずが、途中で方向回転して、あお向けで落ちることになった。どっちの方がいいってことは分からないけど。

もうだめだって思った。きっと、おれが死んでも、誰もわからないだろうな。ダルダがここから出られるっていう保証もないし。おれたちのことを知っている奴も、地上じゃ少ない。けど、あまりにも帰ってくるのが遅いって気づいたら、きっとおれたちの家とかを調べるんだろうな。荷物は一緒に持ってきちゃった。だから、日々日々何を持ち歩いてきたこととかは、わからないはず。

でも、やっぱり親父とお袋は見つけたかったよなあ。今頃、どこほつつき歩いてるんだよ。おれはさ、兄貴としての責任があるんだ。弟に、もう一度父親と母親に会わせてやらなくちゃいけないってさ。シャラは、おれよりも親父とお袋に会っている回数が1回だけ少ないんだ。

親父とおふくろが出て行ったとき。そのときをみたのは、おれ一人だった。早朝で、シャラはまだ寝てた。まだ冬の終わりごろだったから、いつものおれなら、寒い寒いってなかなか布団か

ら出られないだろうな。けど、そのときだけは、一発で起きれた。胸騒ぎがした。嫌な予感がした。で、的中した。

階段をおりていたら、親父とお袋が、玄関前で大きな荷物を抱えているのを見た。お袋のほうは泣いていて、親父がお袋の背中をさすっていた。

「親父？お袋？なにやってんだよ。どっか、出かけるの？」

おれがそう声をかけると、二人ははっとしたように顔を上げ、こっちを見た。数秒の沈黙が流れたと思ったら、お袋が顔をおおって、声を上げて泣き出した。いきなりのことで、まったく意味不明だった。おろおろしているおれをおいて、親父がお袋の背中を押して、玄関から出て行くとした。

「ち、ちょっと待てよ！どこ行くんだよ、そんな荷物もって？旅行？あ、じーちゃんとばーちゃんのところ？最近、あの二人も歳だからな。看病とかにでも行くんだろ。な、合ってる？」

おれは、二人がうなずくのを待った。内心、うなずくわけじゃないか、と思っていた。だって、じーちゃんとばーちゃんのところに行くだけで、泣くか？泣かないだろ。

お袋は泣き続けて、親父はちらりとこっちを見たけど、何も答えずに外に出ようとした。

「待ってば！」

そう叫ぶと、お袋がすこし顔を上げ、親父に何かをつぶやいた。なんていったのかは、おれには聞こえなかったけど、親父には聞こえたらしく、一回うなずくと、お袋を玄関前に座らせ、おれのほうに近寄ってきた。

「ディオル。ちょっと聞け」

親父の低い声が、頭に響いた。

「父さんたちは、ちょっと旅に出る。ちょっとした趣味っていうか、仕事でな。だから、心配しなくていい」

親父はにっと笑っていったが、おれからしたら、笑い事なんかじゃなかった。旅？趣味？仕事？なにあってんだよ。心配するに決まってるじゃん。

「何でもいいけどさ。おれたちを置いていくのか？」

そういうと、親父はふっとおれから目をそらした。はっきりしない。こんなの、親父らしくない。

「なあ、答えろよ。おれたちを置いてくのか？趣味とか、仕事とか、本当はそんなんじゃないだろ？おれ、知ってるんだよ。親父やお袋が、部屋で何してるかさ！」

泣いていたお袋でさえも、あのときは顔を上げた。その場の空気が凍りつく。

二人は、個人個人の部屋で、何かを研究しているみたいだった。ドアの隙間から、ちらっと見たことが、一度だけあった。なかには、宝石の破片とかがたくさん転がっていた。色や形は様々で、綺麗なんだけど、そこにいる親父たちはおかしかった。

「だめだ。こんなんじゃ……、だめなんだ！」

そうって、親父が手に持っていた黄色い宝石を、俺が盗み見していたドアに投げつけた。目の前で宝石が砕け散り、ギョツとした。気づかれたかな、とおもったけど、投げたのが偶然おれがみているドアに当たっただけで、心配はいらなかったみたいだ。

「もっと・・・・・・・・、強いセーレ族の力を・・・・・・・・！」

セーレ族。聞いたことがある言葉だった。伝説とか、言い伝えにひょいひょい出てくる部族。その伝説によると、セーレ族は、めちゃくちゃ頭が良くて、超能力とかも使えるらしい。一番特別なのが、いわゆる精霊を呼び出すことができること。しかも、その精霊を、自分に使いさせることもできるんだとか。で、見た目での一番の特徴は青い瞳。それも、ブルーグレイとか、微妙な青色じゃなくて、宝石みたいに透き通っている青色で、瑠璃色とか、海みたいな色だったりする。

でも、なんで親父がセーレ族の力とかを？そう思って、思わず乗り出したところを、見つけて、ドアの外に放りだされた。

きっと、親父たちははその「セーレ族の力」をかき集めるために、出かけたんだと、おれは思うんだ。

6, ようこそ、ボクのおもちゃ箱へ！！

まあ、おれがおちてからどうなったかっていう話に戻ろう。

パチャンツ・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・ん？あれ。死んで、ない？何かの上に乗っているっぽい。冷たくて、さらさらしている。

起き上がってみてみると、おれが乗っていたのは、ハスの葉っぱを大人ひとりが乗れるぐらいまで大きくしたやつだった。ランプで周りを照らすと、おれが乗っているのと同じやつが、すぐ近くにも浮いていた。ほかにも、明かりが届く範囲までずーっといろんなところに浮いている。すごく透き通った水。透き通りすぎていて、ぎゃくに不気味だ。

「ディ、ディオルくん！？」

そうってさっきおれがおちたところから顔を出したダルダだったが、すぐに安堵の表情に変わった。おれは、さっき落ちたところから2 mぐらい下にいたからだ。

「ああ、なんとかかな」

「あがれる？」

「こんぐらいなら、余裕でっ」

踏み込んで、角になっているところをつかみ、腕の力で登る。ダルダは、はあ〜っとため息をついていた。

「君、どれだけ力があるんだよ・・・・・・・・」

昔から、みんなにそう言われ続けた。頭は悪いけどばか力だけはあった。運動会とかだって、準備の担当はいつもおれだった。みんな、この仕事を嫌がって、結局はおれに振る。跳び箱とか、そういうのを運ぶには、かなりの体力がいる。だからだと、おれは思っている。思ってるけど・・・・・・・・。

「まあまあ。とにかく、男の子はいた？」

「あんな状態で、男の子を探してられるか！」

あ、確かにな。

「したには、なにかあった？」

「なにかってというか、すごく透き通った水が一面にあって、そのうえに蓮の葉っぱを大きくしたみたいなやつが浮かんでた」

「ふう〜ん・・・・・・・・。きっと、水の上を移動するときは、その葉を通路替わりにして移動するんだろうね」

「たぶんな。でも、ほかには光が届かなくて、よくわからなかった」

「そうか。じゃあ、ここからなら、わかるかも」

ダルダがそういうと、二人同時に、さっきおれが落ちた段差のふちにたって、したを見下ろした。

「ん！？」

下に、あってはならないものを見た気がして、おれは乗り出していた身を引っ込ませた。

「どうした？青い顔して」

「下に、男の子がいた・・・・・・・・」

そう。おれは見たんだ。ライトで照らした水面に、おれたちを案内してくれた、あの男の子が浮いているのを。

顔は青白くて、生きている感じはしなかった。けど、微妙に浮き沈みしてたから、多分、生きてる。そう信じたい。

「ってことは、ここに、姫様とー」

「シャラがいるはずだ！」

お互いに顔を見て、うなずき合う。そして、おれたちはそれぞれ、水面に浮かんでいる葉っぱに降り立ち、シャラと姫様を探し始めた。

「姫ー！姫様ー！ルイナ姫様ー！どこにおられるのですかー！」

「シャラ！どこにいるんだ。かくれんぼはおしまいだ！」

別に、かくれんぼをしているわけではないけど、シャラが意識的に隠れているみたいに、まったく見つからない。広すぎるんだよな、この湖。いや、海？それくらいのスケールだ。

「いたっ！」

シャラらしき男の子が浮かんでいるのを見て、おれは一目散にそっちへ駆け出した。転ぼうが、落ちようが、そんなのどうだっていい。やっと。やっと見つかったんだ。おれの、たったひとりの弟が！

「いたか！」

「ああ。やっぱり、シャラだ！」

おれは、目の前で浮かんでいる弟を見て、涙が出そうになった。やっと見つけたよ、シャラ。帰ろう。また、旅を始めよう。親父と、お袋を探すんだ。

「よっ、と」

シャラを担いで、背中におぶる。少しだけ、葉っぱが沈むのを感じた。重量オーバーとか、ならないよな？

「よかったな、ディオール」

「うん。よかった。ほんとうに、よかった・・・・・・・・」

あ、泣きそうだ。耐えろよ、自分。こんなところで泣いたって、格好がつかないぜ。

「そっちは？見つかったか？」

おれは、涙声になるのを抑えつつ、ダルダに向かって叫んだ。

「いま、探してるんだけど・・・・・・・・。あっ、いたあっ！」

おおおおお！ナイスタイミング！二人同時に見つかるとは。なんてラッキーなんだ。

おれは、上の道のところに、まずシャラをあげ、それからおれが登った。シャラは、水にぐっしょりと濡れてちょっと重かった。それに、まだ気を失っているから、心配だ。大丈夫だよな？おれは医者免許も何も持ってないから、何も言えないけど。第一、勉強は苦手だから、就職するにしても、そういう仕事は向いてないな。

「でい、ディオールくん・・・・・・・・。ちょっと、手伝ってくれるかな？」

見ると、段のしたから、姫様を抱えてぷるぷると震えている腕が伸びていた。大丈夫かよ、こいつ。

「いいけど」

おれが姫様を抱えると、思った以上に軽かった。こんな重さで、ダルダはひいひい言ってたのか？なっさけねえ！

「おまえ、こんな重さであんなに頑張ってたの？」

おもわず、声を出して聞いてみた。

「頑張って、何が悪い。それより、わしを、持ち上げてくれ」

ダルダは、ぜいぜい言いながら、ぴよんぴよんと飛び跳ねているのが見えた。あー、背の高さが、全く足りてないわけね。

「あいあい」

ダルダの両腕をつかんで引き上げようとして、危うくこっちが落ちそうになった。どう踏ん張ればいいのか、全くわからねえ。どんだけ体重あるんだよ。シャラや、さっきの姫様と、すごい違いだぞ。いや、それが歳ってもんかな。

「姫様～！ルイナ姫様～！目を開けてくだされ～！」

持ち上げられたあとのダルダは、すっかり涙目で姫様の肩をつかみ、ブンブンと揺らしている。おいおい、あんまり揺らさないほうがいいような気がするんだけど。

「おい、礼もなしかよ？」

「姫～。起きてください～！」

き、聞いてねえ……………。

「とにかく、もう帰ろうぜ」

そういつて、おれはシャラを担ぎ、ダルダは目を腫らしたまんま、姫様をお姫様だっこで運んでる。さっきのはいいてきた扉に近づくが、なにかおかしい。

……………あ。扉が閉まっている。おれたちが入ってきたとき、あらかじめ扉は開いていたし、そのあと閉めもしなかった（第一、おれの力でも、扉は動きもしないぐらい頑丈だったんだ）。それに、こんなところには風も吹かないし、そんなちょっとやそっとの風で締まるような扉じゃない。

「だれかが、閉めた？」

そういつたとき、いきなり背中を思いっきり蹴られた。

「ウグッ！」

背骨がポキッという音を出すぐらい、おれはのけぞった。

「いつてえ！誰だよ、やったの！ダルダ、お前か！？」

我ながら、すごい剣幕でダルダをにらんだ。しかし、ダルダは姫様をお姫様だっこをしたまま、ぶんぶんと首を振った。ダルダじゃないなら、いつたい誰が？

ん。ちょっと待て。背中が軽い。さっきまで、シャラをおぶっていたいたもんだから、それなりの重さはあつただけだな。

「シャラくん！」

ダルダが、叫んだのを聞いて、おれは後ろを振り向いた。

「シャラ！」

そこには、シャラが立っていた。まだ起きたところなのでフラフラするのか、足取りがおぼつかなかった。

「大丈夫か、シャラ？心配したんだぜ」

おれはそういったが、シャラは頭をたらしたまんまで、返事もしない。

「なあ、大丈夫かって。返事ぐらいしろよ」

いい加減イライラしてきて、シャラにそう言った。すると、シャラがいきなり、拳をふりかぶって、殴りかかってきた。

「うわっ！」

とっさにしゃがんでパンチを避けたけど、どうしちまったんだ、こいつは。シャラは、絶対に暴力で物事を解決しようとか、そんな性格じゃない。好戦的でもない。いつも、おれとは反対で、おとなしくて、ケンカにも参加しなかった。ぎゃくに言えば、剣の扱いは、おれよりずっと下手だけど。

「どうしたんだよ、シャ・・・・・・・・」

文章を言いかけて、今度はキックが飛んでくる。なんなんだよ。どうしちまったんだよ、シャラ！

ちらりと見えたシャラの目に、光はなかった。ただただ、目的もなく行動しているってかんじ。操られてるっていうか。

「もっとだ。もっと、おもしろいショーを見せてよ」

なにがショーだよ。って、あれ？いまの、誰の声だ？

シャラではない。おれでもない。ダルダを見るけど、目を見開いた状態で、やっぱり首を横に振る。姫様を見ても、まだぐったりとしていて、この人が言った可能性は低い。

「ボクだよ。この部屋の奥にある、鏡」

鏡？鏡が、なんでしゃべるんだよ。常識的に、ありえないだろ。

「常識なんて、気にしちゃダメだよ。そんなの気にしてたら、周りが見えなくなっちゃうもん」

鏡の声は、小さな男の子ぐらいだった。声変わりもしてない、シャラよりも年下だろう声だ。その声が、今はクスッと笑うような声を出している。

「ようこそ。ボクの子供部屋・おもちゃ箱へ」

7, 暇だったから

おもちゃ箱？ここが？

「そう。この部屋そのものが、ボクの子ども部屋で、おもちゃ箱なんだよ。どう？けっこうきれいでしょ」

うーん。きれいなのはきれいだけどさ。

「おもちゃ箱っていったって、おもちゃはどこだよ。おもちゃがなかったら、ただの箱だぜ？」

おれは笑うのをこらえながら、そういった。もしかして、空想好きか？自分のことを「ボク」って言って、おもちゃもないのに、自分のアジトを「おもちゃ箱」呼ばわりする、誘拐犯か。変わってる。

「とにかく、お前がおれの弟を操ってるなら、さっさと解放してくれ。おれたちは、旅をしてるんだ」

「旅なんて、一人でやればいいじゃないか。それに、ここはすごく面白いところなんだ。みんな、ボクのおもちゃたち。おもちゃ自身も、楽しいって思っているはずだよ。しかも、さっきまでその子たちががついていた水は、時の水。そこにいれば、大人にならずに済むんだよ。どう、すごくない？」

なにもわかってない、こいつ。一人でやればいいだって？

「ふざけんな……！」

「？」

「鏡」は、なぜかふっとだまった。

「一人でやったらダメだから、ずっと二人でやってきたんだ。二人で、親父とお袋を探すんだ！さっさと弟を返せ。おれの弟だ。シャラの兄貴は、このおれだけだ！」

どこへともなしに、おれは叫んだ。また、沈黙が続く。

「ぷっ……。クククク……」

こんどは、そんな笑い声が聞こえた。

「なに言ってんののお？その子が、ここにいて楽しいって言ったんだよ。大人なんて、嘘つきで自分勝手に、何か都合が悪いときは、人のせいにしようとする！大人なんて最悪だ。子供がなりたくないものNo. 1だ！そんなものに、わざわざ時間をかけてなる必要なんてない。そう言ったんだ」

ウソつけ。シャラが、そんなこと言うわけない！

「それと……。兄さんのことも、あまり好きじゃないっていったな」

「っ！」

シャラが、おれを……。？

いや、ウソだ。こんな正体もわからないやつの言うことなんか、聞いちゃダメなんだ。

「そうやって、聞きたくないことには、逃げてばかりだからってさ。まさか、君がシャラクんのお兄さんだったとは。どう？弟の心境を聞いて。感想をどうぞ」

「鏡」は、まるで何かのアナウンサーみたいな口調でいった。

「いてっ」

子どもの力でも、大勢で髪や服をひっぱられたら、たまったもんじゃない。我に変えることはできたが、そんなの、ここじゃ意味ないよ。

次に、いきなり後ろに倒された。起き上がる前に、肩とか足を押さえられる。

すこしは抵抗するけど、全力で振り払うわけには行かない。怪我でもさせたら、あとがめんどうだ。

「ああ、もうっ！」

おれは耐えられなくなって、腕を左から横へと振った。すると、今度は子供たちの方が、吹き飛ばされた。水に落ちた奴もいるらしく、ボチャン、バチャンと音がたった。遠くにいるダルダでさえも、爆風に耐えているみたいに、髪やヒゲをなびかせている。ちなみに、ダルダが抱えていた姫様は、まだ起きていないらしい。

「え？」

なんだったんだ、今の。今の風、おれを中心にして吹かなかったか？つまり、おれが、あの風を起こした？ なわけない。おれは、人間だ。超能力とかが使えるわけでもない。SFじゃあるまいし。

なんにしろ、子供はいなくなった。鏡への一本道もできたわけだ。よし、いける。

「うおりゃあああああああっ！」

再び、勢いづけて鏡へとはしる。今度こそ。もう慣れた……はずなんだから。いけるって。大丈夫だ。

鏡の2mくらい前で踏み切って跳び、剣の刃を真下にむける。

いける。

なぜか、その時の鏡は、前ではなく、上を向いていた。まるで、「見てみなよ、君の顔。すごい顔だね～」とでもいうように。

ちらりと映ったおれの顔は、一言で言うとすごい形相だった。そして、瞳もおかしかった。右目は、いつもどおりの琥珀色。けれど、もう片方が問題だった。青い。海のように青い。

まるで……。

神話に出てくるセーレ族みたいに。

でも、そのときはなぜか、そんなことは気にも留めなかった。ただ、「鏡」を倒すこと。それだけだった。

キィィィィィン……。

するどい音が部屋中を包み、おれ自身も耳を押さええなくなった。

鏡のほうは、なかには青い霧のようなものがもやもやと映っている。さらに力をこめて、鏡を剣でおす。

しかし、割れた鏡だけでなく、触ってもいない枠についている宝石だった。ビシッと音を立てて、鏡と宝石にひびが入る。中に映っていた青い霧が、ひびの間から漏れ始めている。それは床をつたって、床の上や葉っぱの上に倒れていた子どもたちの下に流れ、しみこんでいく。宝石が粉々に砕け散った瞬間、鏡は割れ切らないうちに、つたからはがれ、地面におちた。鏡も、一

段と大きいひびが入ったところだった。

ようやく地面に着地したおれは、つかれきっていた。

「ディオルクン……、だっけ？」

「鏡」が、弱々しい声を上げた。もう部屋から出て行こうとしていたおれは、足を止めて、振り向いた。

「なんだよ」

すこし警戒しながらも、そういった。「鏡」からは、まだ青い霧が漏れてる。

「ボクは……、みんなと遊びたかった、だけなんだ……。暇だっただけなんだ」

「暇だったって……。そんなことで、関係ない人間巻き込むなよ。それに、なんだったら外に出て遊べ」

「無理だよ、こんな体じゃ……。それで、ボク、ある人に頼んだんだ。みんなと、遊びたいって」

「ってというか、お前何もんなんだよ。まず、名乗ったらどうだ？」

「ああ、忘れていた。あまりにも楽しかったから……。ボクは、昔の大地主の息子で、エクっていいです。ボク、元から体を動かすのはあまり好きじゃなくって。ってというか、動かなくって。ちょっと、不自由だったんだ」

「ふうん。昔から、大変だったんだな」

ほらな。やっぱり完璧な人間、いないんだよ。

「うん、まあ。で、ボクはそのうち、本当に体がうごかなくなっちゃって。衰弱死っていうのかな。それになっちゃって。それでボクは死んじゃって、何を考えているのか分からないけど、父さんたちが、ボクの魂を封じ込めた鏡をここに持ってきた。たぶん、一緒に埋める宝を、墓荒らしに見つかりたくなかったんだらうね。父さんたちは、そういう人だ。人のためか、自分のためか分からないことばかりする。こんなところにずっといたら、寂しいに決まってるじゃないか。成長することも、歳をとることも、何もできないんだ。どう思う？」

「そりゃあ、寂しいに決まってるだろ」

「でしょ？それでなんだけど、ちょっとお願いがあるんだけど」

「？」

「ボクを、この鏡を、外に連れてって欲しいんだ」

「それぐらいのことなら、別にいいけど」

「ありがとう……」

「おれも、お前に質問がある」

「なに？」

おれは、息を吸って、単刀直入にこういった。

「おれがお前を、一回目に攻撃しようとしたとき。お前に、なんか映ったよな？一人お子供が、周りの大人や子供に嫌われているところ。あれはなんなんだ？」

「ああ、あれ？君の記憶。おぼえてないの？ま、覚えていたくない記憶だよな、あんなの」

「覚えてるわけないだろ！あんな小さい頃のこと……………」

覚えてなんか、ない。あんな、小さい頃のこと。

「ま、よろしくね。ボク、もう終わりそうだし」

終わりそうって……………。死ぬってことかよ！

「じゃあな、エク」

おれがそういと、エクはさいごのさいごまで青い霧をだしきり、静かになった。

「ん……………」

聞きなれたはずの懐かしい声がして、おれは振り向いた。

「シャラ！」

鏡をひつつかんで、床に倒れているシャラのもとに走った。